



清水九兵衛 《FIGURE 16》 1988年 千葉市美術館蔵

館長のつれづれコレクション案内 土と人の関わりを探究した鈴木治による新しい焼き物



鈴木治 《春ノ魚》 陶 1988年 19.5×28.8×18.6cm
千葉市美術館蔵

わずかなゆがみ、たわみ、へこみを持った面とくっきりとした稜線を持つ直方体が低い山形に絞られて、揺らぐようなかたちの陶の作品です。暖かい土色に朱をおびた濃い色の化粧土が施され、表面には陶土が含んでいたガラス質が焼き縮めの熱で結晶して、華やかさを加えています。この作品は、木箱に収められており、蓋には作家自身による墨書「春ノ魚」の文字があります。魚編に春と書いて「鱈」ですが、作者はサヨウくらいにしておいてください、とっていた

そうです。私には鱈のような海の魚よりもヤマメやイワナのような溪流の魚に思えます。柔らかな陽光で温められた溪流の中をきらめきながら泳ぐ魚のようです。明るいパステル調の色や緩やかなかたちが、春の趣とつながるのでしょう。こねた土でかたちづくり窯で焼かれてできたこの作品は魚と言われれば、そのようでもありますが、一見して魚に見えるものでもありません。このように写実を離れた陶の作品を鈴木治はつくり続けました。

鈴木治の父・宇源治は美濃から明治期に京都に上り、京都五条坂で千家十職のひとつ永楽善五郎工房の轆轤師をしていました。五条坂は、江戸時代から続く窯元がいくつも並ぶ陶磁器製作の盛んな地で、1960年代の高度成長期に窯から上がる煙が公害問題になるまで登り窯が林立していたといわれています。治は1930(大正15)年11月に三男として生まれ、父に轆轤の指導を受けた後、戦中に京都市立工業学校で窯業を学び1943年に卒業。応召し、内地で海軍航空隊の整備兵となり、終戦とともに京都に帰ります。翌年、京都の「青年作陶家集団」に参加し、翌1947年、同会の第1回展に出品したほか第3回日展に初入選を果たします。しかし、従来の陶芸に疑問を抱き、八木一夫、山田光など、五条坂で製陶を営む家の若手の仲間たちとともに1948年に「走泥社」を結成して新しい時代の陶芸を模索し始めます。彼らは戦後に日本に紹介されたパブロ・ピカソやジョアン・ミロなどによる土を素材とした立体作品や、イサムノグチの陶彫刻などに触発され、従来の陶磁器製作の道具の用法や茶道との関係などから解放された焼き物を目指しました。

轆轤による左右相称の丸い成形から離れ、手びねりと呼ばれる技法で方形やゆがみのあ

るかたちを生み、鈴木治の作品は特有の詩情あるものとなっていきました。1954年には器の口を閉じた「作品」を朝日新人展に出品し、食物や花を容れる従来の陶磁器の用途を否定して注目されます。こうした作品は「オブジェ焼き」と呼ばれますが、走泥社は縄文時代から続く土と人のつながりに根差した現代生活の中の焼き物にこだわり、彫刻に向かうことはありませんでした。鈴木治は中国墳墓に埋蔵された副葬品「泥象」の展覧会を見て感銘を受け、1965年頃から「泥象」シリーズを始めます。古くから人々とともにある土による製品で、日常用いる器とは異なる「泥象」を自らの制作に通ずると鈴木治はとらえたのでしょう。走泥社での同志八木一夫は兵役で初めてアルミの食器で食事をし、「こんな情けない器で食すのか」と思い、人の生活における陶磁器の意味や人と土との関係を深く考えたことがその後の制作の根底にあると記しています。走泥社の作家たちが用途を持たない作品とともに食器をつくり続けているのうなずけます。

土は多くの生命を育み、その住処ともなり、人とかがわって様々な姿で私たちの身近にあります。土のつくり出すものの豊かさを「春ノ魚」は教えてくれます。

【館長 山梨絵美子】

清水九兵衛／六兵衛

／ 生誕100年 ／ KIYOMIZU Kyubey / Rokubey VII Retrospective

担当学芸員インタビュー

清水九兵衛／六兵衛（1922-2006）は、彫刻と陶芸のふたつの表現領域で活躍した作家で、今回は初めての回顧展となります。清水九兵衛／六兵衛とはどんな人物なのか、どのような展示が展開されるのか、ふたりの担当学芸員に聞きました。



【図1】五東衛《壁》1966年 個人蔵



【図2】清水九兵衛《AFFINITY D》1974年 神戸市※



【図3】清水九兵衛《AFFINITY K》1975年 宇部市常盤公園※

——「清水九兵衛／六兵衛」と、タイトルに名前が併記されていますが、ひとりの人物を指しているのですよね。

藁科 愛知県名古屋に生まれた塚本廣は、1951年に京都を代表する名家・六代清水六兵衛の養嗣子となります。この人物が、のちの七代清水六兵衛であり、清水九兵衛です。「九兵衛」は、彫刻を発表する際の名前です。

——実は、千葉ゆかりの作家でもあります。

藁科 1942年に徴兵され、終戦後は、当時市内の小中台町に設置されていた復員局で嘱託として残務整理をしていました。そのときは、園生町に下宿していたので、千葉にゆかりがあります。

——生涯にわたって、どのような作品を制作したのでしょうか。

森 本展では、およそ半世紀にわたる作家活動を3期にわけ、1950-60年代の陶芸作品、1960-70年代の彫刻作品、1980年から2006年に亡くなるまでの彫刻作品と陶芸作品をご紹介します。彫刻について言えば、具体的なモチーフを持たない、抽象彫刻を一貫して手がけました。素材は、初期の真鍮や木から70年代にはアルミニウムへと変化していき、金属の使用は九兵衛作品の特徴にもなっています。

——陶芸と彫刻は、清水氏のなかでたがいに影響しあっていたのですか。

森 1960年代後半の五東衛名義の作品や九兵衛の初期の作品は、動きが意識されたものが多く【図1】、うつわの作り方と彫刻の作り方が

つながっている部分も、確かにあったと思います。ただ、1969年から70年にかけてイタリアを拠点にヨーロッパに留学したことから、その後の作風は大きく変化していきます。

——清水氏が撮影した写真も出品されますが、建物の外観の写真ばかりですね。

森 建築物、とくに屋根や窓を研究テーマとして、海外研修に行っていました。そこで、城塞都市としてのイタリアの街の情景と、京都の黒瓦の屋根が続く街並みの共通点や違いに気がついたそうです。その風景の差異を、どう彫刻に落とし込むかというところで、場との関係性を築くことができる水平的な造形が選ばれていきました【図2】。

藁科 これは現代日本彫刻展の写真ですが【図3】、普通の彫刻だったら立ち上がっていますよね。一方で九兵衛の作品は……ということなんですね。タイトルには「AFFINITY（親和）」と付けられています。

——それは、地面との親和ということですか。

森 場所や空間、環境との親和と言えます。素材のアルミニウムも、表面にヘアラインという処理がほどこされ、柔らかく光を反射させています。空間に作品をなじませることが、「AFFINITY」のシリーズでは目指されていたのだと思います。

藁科 ふつう、野外彫刻におけるアルミニウムやステンレスは、鏡のように空間を取り込むために用いられることが多いと思いますが、それをはじめから消してしまっているんですね。

——あらためて、どの彫刻も実にふしぎなか

ちをしています。

森 70年代には、こういった空間との関係性を持つ「水平」や「垂直」を軸に、彫刻が展開されていきます。さらに、80年代からは、野外で恒久的に設置されるパブリック・アート（公共の場所に設置された芸術作品）も多く手がけられました【図4】。耐久性の観点から表面への塗装に朱というカラーリングが生まれ、野外彫刻展でも高く評価されました。

藁科 朱の鮮やかさは印象的です。ほかの彫刻家と比べ、清水氏は、野外彫刻にたいする心構えが違っていたように感じます。当時は、室内にあったものを室外に持っていき、というような野外彫刻が多かったですから。

——一方で、1980年には七代清水六兵衛を襲名しています。陶芸は手がけなかったのでしょうか。

藁科 本人も、どのように制作したらよいか悩み、襲名後にはじめて陶芸を発表したのは1987年のことでした。それまでは、七代清水六兵衛としての個展はやっていなかった。これはなぜかというと、六代清水六兵衛が急逝したことが大きい。養父の死はあまりにも突然で、家を継ぐ心がまえもまだできていなかったんです。

森 1980-90年代は、陶芸と彫刻を分けて考えつつも、造形における関係性やつながりが感じられる時期です【図5】。清水氏は襲名したことで、陶芸家としての自分を十数年ぶりに見つめ直す必要に迫られました。それは、陶芸家と彫刻家を総合する試みでもあり、同時にその難しさは清水氏自身が引き裂かれる体験すらもたらしたように思います。

——ふたつの領域で活動することで、苦悩もあったのだらうと想像できます。

藁科 外から来たという「ちんじゅうしゃ」のように見えますが、なにか自明のものとして捉えられていることを、客観視できる立場にあったとも言えます。陶芸も、彫刻も、どちらも外から取り組んだ人。だからこそ、ほかの人にはできないことをできたのだと思います。このことは、清水九兵衛／六兵衛という人物の作品から、今もなお多くのことを学ぶことが出来る理由です。

——最後に、展覧会の見どころをぜひ教えてください。

森 これまで語ってきた陶芸や彫刻はもちろんですが、そのほかにも、食器などプロダクトにかかわる作品や、彫刻作品の図面やマケット（模型）などの資料も多数展示します。生誕100年を記念して、彫刻家・陶芸家としての清水九兵衛／六兵衛の多様な仕事が回顧できる初めての展覧会になっています。

——1階のさや堂ホールでは、会期中、前後期で関連展示が行われます。

森 前期では、清水氏の孫にあたる陶芸家・清水宏章氏の個展を、後期では、陶表現を行う4人の彫刻家による空間と作品の関係性をテーマにしたグループ展を開催します。どちらも清水九兵衛／六兵衛の造形思考の可能性を、次代につなげていくきっかけになればと思っています。こちらもあわせてぜひご覧ください。

[話し手: 学芸員 藁科英也、学芸員 森啓輔]



【図4】清水九兵衛《緋甲 (PROTECTOR I)》1980年 神戸市 (神戸総合運動公園) ※

※本展覧会では図面や写真などの資料を展示します。



【図5】七代清水六兵衛《花陶器》1987年 京都市美術館蔵

生誕100年 清水九兵衛／六兵衛

会期 2022年4月13日[水]～7月3日[日]

会場 8・7階 企画展示室

休室日 5月2日[月]、23日[月]、6月6日[月]、20日[月]

詳細はホームページよりご覧ください

「生誕100年 清水九兵衛／六兵衛」展 さや堂ホール関連展示

前期 清水宏章「朱」

会期 2022年4月13日[水]～5月19日[木]

会場 1階 さや堂ホール

休室日 5月2日[月] 観覧料 無料

後期 インクルーシブ・サイト—陶表現の現在

会期 2022年5月27日[金]～7月3日[日]

会場 1階 さや堂ホール

休室日 6月6日[月] 観覧料 無料

出品作家 藤原彩人、北林加奈子、桑名紗衣子、土屋裕介



2022年1月13日～4月3日 「つくりかけラボ06 岩沢兄弟|キメラ遊物園」レポート

キメラ遊物園を探検だ!

子どもアトリエに現れた「キメラ遊物園」では、岩沢兄弟のおふたりによる”おもしろたのしい”アイデアが日々爆発! 創意工夫あふれるプロジェクトをレポートします。

キメラ遊物園とは
こんなところ!

ふれあい遊物園
キメラ遊物やキメラ遊び
で生まれた遊物のすみか。

ガチャガチャを回して
「キメラ遊び」!

出てきた
目玉シールを
モノに貼って
遊ぼう

岩沢兄弟の実験室
岩沢兄弟の作業スペース。
壁にもテーブルにも工具が
いっぱい!

野生遊物ゾーン
遊物になるまえのモノ置き場。
鳴き声が聞こえてくるかも?

なにをして遊ぶ?

あみす
あみす

イベントも
たくさん

たくさん
の新種
の遊物
が誕生!

見覚えのあるマシーンで
ことばあそび!

不思議な地図を
作ったり……

会場と居酒屋を
中継で繋いだり……

つくりかけラボ06

岩沢兄弟|キメラ遊物園

会期 2022年1月13日[木]～4月3日[日]

会場 4階 子どもアトリエ

観覧料 無料



次回予告!

2022年4月13日～7月3日 「つくりかけラボ07 植本一子|あの日のことおぼえてる?」

作家・植本一子さんインタビュー

[取材日:2022年2月24日]



つくりかけラボ07では、写真家の植本一子さんをお招きします。植本さんは、写真家として作品や写真集を発表したり、「天然スタジオ」という写真館を立ち上げたりするかわら、作家としても活躍し、多くの著作を残しています。子どもアトリエという空間で、植本さんは、どのような展示を行うのでしょうか。このようなプロジェクト的な展示ははじめて! という植本さんに、お話を聞きました。

—あらためて、どのような展示が展開されるのかお聞かせください。
「あの日のことおぼえてる?」というタイトルをつけました。来場者のみなさんが、過去のとある「あの日」を思い出すことから始まる展示です。まず、自分の思い出や、一緒に来た人との共通の思い出を、アンケートに残します。そのあと、自分、あるいは自分たちの写真を撮影・印刷し、そのアンケートに貼付します。アンケートは2部できあがる予定ですが、そのうち1部は、展示室内のバインダーに綴じ、いつでもだれでも読める状態になります。もう1部は、封筒に入れ、持ち帰ることができます。

そうですね。ふだんは「天然スタジオ」というスタジオでいろんな人の写真を撮っているのですが、どうしても時間が限られている中でコミュニケーション不足の上で撮らなければならないんです。そこに、うしろめたさやさみしさを感じていました。その人たちの背景を知った上で撮ると、写真も変わるだろうな、と思います。そういう気持ちを、ワークショップに落とし込みました。

が重なって、ひとつの「アルバム」ができあがります。とある家族だけではなく、いろんな人の、千葉市美術館を中心としたふしぎな縁のアルバムができる。最後の日の完成が楽しみです。

—企画の相談を受けた際、率直にどのように感じましたか。
やったことのないことでしたが、まだ時間もあったので、なんとかなるかな、と思いました。なにより、新しいことに挑戦してみたい気持ちがとてもあったので、よろこんでお受けしました。うれしかったです。

—過去、現在、未来と、時間の広がりを感じる展示ですね。
「過去」を思い出し、「現在」の写真を撮り、それが「未来」に残っていく。そして、この展示に来た日も、いつか「あの日」になる。なにより、つながり続けている「今」が、記録として残るといふ、と思っています。今現在の大切さや、一瞬一瞬がかけがえないということをおぼえてほしい。そういうものを残せる企画を目指して進めています。

—企画の段階では、写真を撮影する「今」に重点を置いていました。それが、長い時間軸で捉えられる企画に発展してとてもうれしいです。自分でも、どうしてこんなにややこしいことをやろうとしているんだろう、と思っています(笑)。これまで、条件反射的に自分の内面を書いたり、写真を撮ったりしてきたので、自分の根底にあるものをかたちにしたことがあまりなかったんです。でも、そんな自分でも、「表現」をやろうと思うと出てくるものがあるんだな、と安心している部分もあります。

—最後に、来場者のみなさんには、どんなことを楽しんでほしいですか。
かしこまって写真を撮ることがあまり得意ではない人でも、撮影しやすい環境を作ろうと思っています。ですので、恥ずかしがらずに、楽しく記念を残さず、という気持ちでやってもらえたら! そこからコミュニケーションが生まれたり、話のきっかけになれば、とてもうれしいです。ぜひ、ふらっと来て、ふらっと気軽に体験してください。

—そして、開幕が近づいてきましたが、いまはどのようなお気持ちですか。
「つくりかけラボ」という名前が助けています(笑)。もちろん間に合わせるつもりですが、たとえ開幕に間に合わなくても、「いつでも更新できる」というところがとても心強いです。

—植本さんは写真家でいらっしゃいますが、展示には、写真撮影以外のワークも含まれていますか。
はい、そうです。

—会期中、植本さんはどのように展示に関わる予定ですか。
週に一回ほどはようすを見に来たいと思っています。みなさんが撮ったもの、書いたものが読みたいです。この展示では、たくさんの思い出

[話し手: 植本一子 (本展作家)]

つくりかけラボ07

植本一子|あの日のことおぼえてる?

会期 2022年4月13日[水]～7月3日[日]

会場 4階 子どもアトリエ

観覧料 無料



その時あなたはどのように思いましたか?

どう感じていましたか?

美術館の仕事を紹介します！

その15 ワークショップパートナーが決まるまで

「C'n」vol.101でご紹介した、年間を通して幅広いジャンルのワークショップを開催するワークショップパートナー制度。毎年、どのようなプロセスで登録パートナーは決まっているのでしょうか？ 制度の裏側をのぞいてみるのと同時に、新年度のパートナーもご紹介します！
[テキスト：学芸員 田口由佳、イラスト：しらいしののこ]



ワークショップパートナー制度は

1年ごとの登録システムです。毎年秋から冬にかけて募集を行っています。みなさんそれぞれに熱い想いやビジョンをお持ちなので、応募者と必ず一人ずつ面接を行なった上で選考していきます。

選考では

美術館と一緒に参加者が主役の場づくりができそうか、美術館で開催する意味があるプログラム内容か、美術館に新しい価値をもたらしてくれるそうか、これから地域の中で一層の活躍が期待できそうかなど、さまざまな観点から検討を重ね、決定しています。

登録決定後は

合同で説明会を開催しています。パートナー同士はその場が初顔合わせになりますが、互いの企画をサポートしあう提案が出るなど、緩やかなつながりもそこから生まれています。

◎ 5～6月にワークショップを開催するパートナーを紹介します！

羽山加奈子さん(陶芸家)



5/8日
開催予定

モザイクタイル文様皿
～さや堂ホールタイルをモチーフに～

水野谷八重さん(漆芸家)



5/15日
開催予定

金継ぎワークショップ 初級編

高橋恵子さん
(イラストレーター、アートワーカー)



6/4土
開催予定

画用紙は、わたしだけの遊び場

小塩敦子さん(染色家)



6/28火
開催予定

泥から染めるべんがら泥染め



※各企画の詳細は美術館HPでご確認ください。

千葉市美術館に「柿の木」がやってきた！



2022年2月19日(土)に、「時の蘇生・柿の木プロジェクト 柿の木植樹式」を行いました。

「時の蘇生・柿の木プロジェクト」は、現代美術家・宮島達男氏による取り組みで、長崎で被爆した柿の木2世の苗木を世界中に植樹しています。千葉市美術館では、2020年に開催した「宮島達男 クロニクル 1995-2020」展に関連して、本プロジェクトを実施することとなりました。

美術館の入口の花壇スペースに植えられた柿の木。植樹式では、宮島氏や実行委員のみなさま

も来館され、植樹にあたってのお言葉をいただきました。最後には、参加者のみなさんの手で、苗木に土をかけてもらいました。雨が心配なお天気でしたが、なんとか持ちこたえ、無事に植樹式を終えることができました。

「時の蘇生・柿の木プロジェクト」は、10年間にわたり、関連するワークショップやイベントを行うこととなっています。みなさんで、柿の木の成長を見守り、平和への思いを育てていけることを願っています。ご来館の際は、ぜひ、成長の様子を観察してみてください。



2022 年度展覧会スケジュール

	2022.4	5	6	7	8	9	10	11	12	2023.1	2	3
企画展	生誕100年 清水九兵衛／六兵衛 4月13日[水]—7月3日[日]		とある美術館の夏休み 7月16日[土]—9月4日[日]			新版画 進化系UKIYO-Eの美 9月14日[水]—11月3日[木・祝]		プラチスラバ 世界絵本原画展 —BIBとアジアの 絵本、いま(仮称)— 11月12日[土] —12月25日[日]		没後200年 亞欧堂田善展 2023年1月13日[金] —2月26日[日]		第54回 千葉市民 美術 展覧会 3月4日[土] —24日[金]
常設展	千葉市美術館コレクション選 ※近世・近代美術は1ヶ月おき、現代美術は3ヶ月おきに展示替えを行います。											
つくりかけラボ	つくりかけラボ07 植本一子 あの日のことおぼえて？ 4月13日[水]—7月3日[日]		つくりかけラボ08 堀由樹子 えのぐの森 7月13日[水]—10月2日[日]			つくりかけラボ09 大小島真木 コレスポンドランス/ Correspondances(仮称) 10月13日[木]—12月25日[日]			つくりかけラボ10 原倫太郎+原游 2023年1月14日[土]—4月2日[日]			